

ドストエフスキー『白痴』における二つの愛

中 谷 博 幸

I

ドストエフスキーは1868年1月から『ロシア報知』に『白痴』の連載を始めた。よく知られたことであるが、彼はこの長編の意図を姪のソフィヤ・アレクサンドロヴナ・イワーノワに次のように書き送った。

この長編の根本思想は、非の打ちどころのないまことに美しい人間を描くことです。だがこれより難しいことはこの世になにひとつありません。ことに現在にあってはなおさらです。どの作家も、わが国の作家ばかりでなく、ヨーロッパの作家ですらもみな、非の打ちどころのないまことに美しい人間の描写に取り組んだ者は例外なく、つねに失敗に終わっています。なぜなら、それは途方もなく大きな課題であるからです。まことに美しいということは理想です。しかし理想は、わが国のそれも、文明開化のヨーロッパのそれも、それが完成されるまでにはまだ程遠い状態です。この世に非の打ちどころのないまことに美しい人物がただひとりだけおります。キリストです。したがってこのどこまでも、無限に美しい人物の出現が永遠の奇蹟であることはもはや言うまでもありません¹（1868年1月13日付け）。

ドストエフスキーは主人公ムィシキン公爵を創作ノートで「キリスト公爵」と呼んでいることから、ムィシキン公爵において「非の打ちどころのないまことに美しい人間」を描くにあたって、キリストのことを念頭においていた。

ところで『白痴』には直接キリストに言及している箇所が何カ所かある。最も重要なのは、バーゼル美術館にあるハンス・ホルバインの『墓の中のキリストの屍』に関するもので、三度触れられる。最初はエパンチン家で主人公ムィシキン公爵が次女のアデライーダに向かって、絵の題材として「ギロチンで首を斬られる一分前、まだ死刑囚が処刑台の上に立って、ギロチンの板に寝かされるのを待っているときの、その顔」を薦めたときで、彼は「最近バーゼルで同じような絵を見ましたよ」と語った（第1部5、上131頁²）。ドストエフスキーはバーゼルに滞在したとき、実際にこの絵を見て、強い衝撃を受けていた。二度目の妻アンナの『回想』によれば、バーデンからジュネーヴへ行く途中、その絵のことを聞いていたドストエフスキーはわざわざそれを見るために、バーゼルに一泊した。彼は20分ばかりその絵に釘付けになり、「興奮したその顔には、何度もてんかんの発作の最初の瞬間に見たことのある例のおどろいた表情が見られた。」発作をおそれた妻は彼を別室のベンチにかけさせた。「彼は次第に落ちついたが、美術館を出るときに、もう一度その感動的な絵を見ようといっけなかつた」と記している³。あとの二回は、ロゴージン家に飾られているホルバインの作品の模写に関わる描写である。ムィシキンは、彼を殺そうとするロゴージンの家を訪ねた。ムィシキンに神を信じているのかと聞いたロゴージンは、「あの絵を見ているのがおれは好きさ」とつぶやいた。

「あの絵を！でも中にはあの絵のおかげで信仰をなくす人だってあるかもしれないよ！」
 「なくして当たり前だな」意外なことにロゴージンは不意にうなずいた（第2部4、中89-90頁）。

最後は、結核によって余命一ヶ月の宣告を受けた18歳の青年イッポリートの手記『わが不可欠なる弁明』の中で語られる。彼もロゴージン家でその絵を見ていた。

その絵にはたったいま十字架から下ろされたばかりのキリストが描かれていた。思うに、普通画家がキリストを描くときには、……いずれにせよ並々ならぬ美の名残を顔にとどめた姿で描くしきりになっている。（中略）ところがロゴージンの絵には、美のかけらもない。それは文字どおりの人間の死体であり、しかも磔刑死する前から果てしない苦しみに耐えてきた死体だった。つまり傷を負い、拷問され、己が身に十字架を背負い、十字架の下敷きとなっては倒れては、番兵に殴られ、民衆に殴られたあげく、六時間の長きにわたって……十字架の苦しみを味わった死体である。（中略）死者の顔といってもそこには苦しみの表情が、あたかもいまだにそれを味わっているかのように、浮かびあがっているのだ。（中略）顔自体はなんの容赦もなく描かれている。それはまさに自然そのものであり、誰にせよあれだけの苦しみを受けた後では、いかにもこのような死体となるに違いないと思われる。（中略）

いったいこんな死体を見せられたうえで、どうして彼らはこのような受難者が復活すると信じることができたのだろうか？（中略）

この絵を見ているうちに、自然というものがなにかしら巨大で残忍な、口のきけぬ獣のように思えてくる。（中略）死者を取り巻いていた者たちは、一人としてあの絵には描かれていなかったが、きっとあの晩にすべての望みを、ひいてはほとんど信仰そのものを一挙に粉碎されて、恐るべき悲哀と動揺を味わったに違いない。（中略）もしもかの師自身が、処刑の前夜にみずからの姿を予見することができたとしたら、はたして彼はあのおりに十字架に上り、あのおりに死んでいったらどうか？あの絵を見ていると、そんな疑問もまた否応なく浮かんでくるのだ（第3部6、中486-489頁）。

ドストエフスキーは、「非の打ちどころのないまことに美しい人間」を描こうとした作品で、しかも彼の考えによればそのような唯一の存在であるキリストを、何故そのような姿で描写したのか。そしてこのキリストの描写は、キリスト公爵ムィシキンといかに関係するのか。この問題を考えてみたい。

II

小説『白痴』は四人の恋愛関係を中心にストーリーが展開する。1867年11月27日の朝、ペテルブルグへ向かう列車の中で二人の青年が出会った。小説はそこから始まる。その一人、世襲名誉市民であった商人の息子バルフォン・セミョーノヴィチ・ロゴージンは、五週間前、ナスターシャ・フィリッポヴナ・バラシコヴァを見かけ、「全身火に焼かれたような気がした」（第1部1、上22頁）。四人のうち最初に出会ったのはこの二人である。その後の物語の外的な出発はこの出会いにある。それはまず彼の運命を変えてしまう。後にムィシキンは「そんな恋が芽生えなかったとしたら、きみはきっとお父さんとそっくり同じような人になっていただろう。……そうになったら従順で無口な奥さんと二人きりでひっそりとこの家にこもり、ほんの時々たま厳しいことをひとことふたこと言うだけで、誰一人信用せず、またその必要もまったく

感じず、ただむっつりと不機嫌に金ばかり貯めているんだ」(第2部3、中79頁)と語った。急逝した父の莫大な財産250万ルーブリを受け継いだ彼は、すべての情を彼女に注ぎ込もうとする。

ロゴージンは1840年生まれである。その2年後に生まれたナスターシャ・フィリッポヴナは7歳で両親を失い、その後は「地主で金満家」であるアフナーシー・イワーノヴィチ・トーツキーによって養育され、洗練された高度な教育を施されるとともに、彼の囲い者とされていった。20歳になったとき、トーツキーが結婚するという噂を聞いて、突然ペテルブルグに上京してきた彼女は、「まったく別の女性」となっていた。「なにか内気で、女学生のようにはっきりとせず、時に独特の快活さや無邪気さで人を魅了」していた姿は消え失せ、トーツキーに対する「深い侮辱の念」と「憎しみ」を表明した。それとともに、「かつては単にかわいらしい少女にすぎなかった」が、今は「格段の美形に変身して」いた(第1部4、上82-90頁)。

ペテルブルグ行き列車に乗っていたもうひとりの青年レフ・ニコラエヴィチ・ムシキン公爵は1841年の生まれで、6歳の時に父を、その半年後に母を亡くした。その後は、父の友人で資産家であったニコライ・アンドレーヴィチ・パヴリーシチェフによって養育された。癲癇の「発作が頻繁だったために、ほとんど白痴同然になってしまった」ムシキンは、新しい治療を実践していたスイス・ヴァレー州のシュナイダー教授の施設に送られ、4年ほどそこで過ごしていたが、親戚が彼を遺産相続人に指定したことを聞いて、ロシアに帰ってきた。その時点ではまだ事の真偽はわからず、所有物と言えわずかに風呂敷包みだけであった。ロゴージンとムシキンは互いに相手に好感をもった。

列車の中でムシキンはロゴージンからナスターシャ・フィリッポヴナのことを初めて聞いた。ペテルブルグに着いたムシキンは、そのままイワン・フォードロヴィチ・エパンチン将軍家を訪ねる。将軍の夫人エリザヴェータ・プロコーフィエヴナはムシキンの遠縁にあたり、今や残された唯一の血縁であった。そこで彼はナスターシャ・フィリッポヴナの肖像写真を見る機会を得た。興味深いことに、ナスターシャ・フィリッポヴナはまず噂の中で、次いで写真の中で登場する。写真から受ける第一印象は、その後の彼のナスターシャ・フィリッポヴナに対する行動を決定することになる。ムシキンはこう語った。「驚くべき顔ですね！それにきっとこの人の運命も非凡なものでしょう。顔は朗らかそうですが、この人はひどく苦しい目にあってきたんでしょう？目がそれを物語っていますよ。ほらこの二つの小骨、目の下の頬が始まるころの、ふたつの小さな点がね。これは気位の高い顔です。恐ろしく気位が高い。ただ分からないのは、彼女は優しい人なのでしょうか？ああ、優しい人ならなあ！それですべてが救われるのに！」(第1部3、上75頁)。数時間後、もう一度その写真を見る機会が与えられたとき、彼の心を打ったものの正体を確かめる。「まるで量りしれぬプライド、侮蔑、ほとんど憎悪に似たものをたたえているかのようでありながら、同時に人を信じやすいような、驚くほど純真な要素も浮かばせている — そんな顔だった。そうした二つの要素のコントラストは、見る者の心に何か同情のようなものさえ掻き立てた」(第1部7、上168頁)。彼はなによりもその顔に「苦しみ」を感じ取ったのであった。同じくナスターシャ・フィリッポヴナの肖像写真を見たエパンチン家の次女アデライーダは、「これほどの美しさは力だわ。こんな美しさがあれば、世界をひっくり返すことだってできるわ！」と熱のこもった声で言っている(第1部7、上170-171頁)。

また、ムシキンはエパンチン家でアグラヤ・イワーノヴナ・エパンチーナと出会う。エパンチン夫妻には、アレクサンドラ、アデライーダ、アグラヤの三人の娘たちがいた。彼女たちは互いに仲が良くいずれも教養が高く美人であったが、20歳の三女アグラヤは「極めつけの美形で、社交界の注目を集めはじめていた」(第1部2、上33頁)。ムシキンは昼食をごちそうになりながら、エリザヴェータ夫人と

姉妹たちの前で、スイスでの初期の経験や、銃殺刑の宣告を受けながら刑の執行の直前に罪一等を減じられた男の話、最近リヨンで死刑執行の現場を見たこと [先ほど触れた死刑囚の顔とホルバインの絵に対するムィシキンの言及はこの時のことである]、さらにスイスでのマリーや子供たちとの交流、そして子供たちとの別れ [これは、『カラマーゾフの兄弟』の最後で重要なテーマとして再び取り上げられる] について語った。彼は姉妹たちの「顔に見覚えがある」ような気持ちにとらわれる。その時の気持ちをエリザヴェータ夫人と三人の娘たちに次のように語った。

先ほどこちらにお邪魔して皆さんのきれいな顔を拝見し、皆さんの言葉をはじめて伺ったとき、ぼくはあのとき以来久しぶりにほっとしたような気持を覚えたのです。先ほどなどは、ひょっとしたら自分こそ本当に幸せな人間ではないかと思ったほどでした。だって会ってすぐに好きになれるような相手にはめったに出くわさないものですが、ぼくの場合は汽車から降りたとたんに皆さんのような方々にめぐり合えたわけですからね。誰にでも自分の気持ちを打ち明けるのは恥ずかしいことだというのはぼくだって重々承知していますが、皆さんには打ち明けてしまいます。皆さんといると恥ずかしさを感じないものですから (第1部6、上159頁)。

この発言にはムィシキンという人間の本質を考えるとときに重要となる事柄があらわれている。それについては後に述べるであろう。ここではムィシキンがアグラヤーから受けた印象を記しておきたい。ドストエフスキーは次のように描写している。

「アグラヤーさん、あなたはとっても美しい人です。あまりにもおきれいで、見るのが怖いくらいです」

「それでおしまい？性格は？」

「美しい方は判断が難しいです。ぼくはまだ用意ができていません。美は謎ですから」(中略)

「ものすごくきれいですね！」公爵はうっとりとしてアグラヤーを見つめながら、熱烈な調子で答えた。「ほとんどナスターシャ・フィリップヴナに引けをとらないくらいです。顔立ちはまったく違いますが……」(第1部7、上162-163頁)。

III

ムィシキンがロゴジンと出会い、エパンチン家を訪ねた11月27日はナスターシャ・フィリップヴナの誕生祝にあたっており、その晩、彼女の家で親しい者が集まることになっていた。ビジネスのパートナーであったトーツキーとエパンチン将軍は少し前からある計画を立てていた。それによると、トーツキーはエパンチン将軍の長女アレクサンドラと結婚する。ナスターシャ・フィリップヴナには、エパンチン将軍の秘書ガヴリーラ・アルダオノヴィチ・イーヴォルギンとの結婚を持ちかけ、持参金75,000ルーブリをトーツキーが提供する、というものである。つまり、ガヴリーラはナスターシャ・フィリップヴナと結婚することによってその持参金を手に入れることができた。彼はアグラヤーに惹かれ、彼女と結婚することを望んでいたが、持参金のために「トーツキーの女」と結婚しようとする。この結婚話にナスターシャ・フィリップヴナが最終的な返事をするようになっていたのが誕生祝の日であった。一方ロゴジンは、トーツキーの計画に対抗して彼女を買い取るために10万ルーブリを持って誕生祝に現れた。このようにナスター

シャ・フィリップヴナは売買の対象となっていたのであった。

ムイシキンはエパンチン家を出たあと、下宿先に推薦されたガヴリーラの家でナスターシャ・フィリップヴナと実際に出会い、いっそう彼女に捉えられていく。招待されていなかったにもかかわらず、やむにやまれぬ思いでムイシキンは誕生祝に現れ、ナスターシャ・フィリップヴナに結婚を申し込む。彼はこう語った。

あなたは苦しんだあげくに、ひどい地獄から清いままで出てきたのです。それはたいしたことですよ。あなたはいったい何を恥ずかしがって、ロゴージンと一緒にいこうなんて思うのですか？そんなのは熱に浮かされているだけですよ……あなたはトーツキーさんに75,000ルーブリを返して、ここにあるものは全部捨てて行くと言いましたが、そんなことができる人はここには一人もいません。ぼくはあなたを……ナスターシャ・フィリップヴナ……愛しています。あなたのためなら死にます（第1部15、上352頁）。

自分は「いつも売り買いの対象でしかない」と思っていた彼女は、ムイシキンに「はじめて本当の人間をみた」（第1部15、上347頁）。ムイシキンのその発言の直後、彼は莫大な遺産を相続することが判明した。ナスターシャ・フィリップヴナはムイシキンと結婚すれば、資産のある公爵夫人となる。しかし、結婚すればムイシキンを破滅させることを恐れたナスターシャ・フィリップヴナは10万ルーブリをガヴリーラに与え、ロゴージンとともに去って行った。その二日後、ムイシキンは遺産相続のためモスクワへ向かった。

ムイシキンが再びペテルブルグに現れるのは、それから約6ヶ月後の1868年6月初旬のことである。この6ヶ月の間、ナスターシャ・フィリップヴナとロゴージン、ムイシキンの間には複雑な出来事が生じていた。小説ではその間のことは、様々な登場人物の回想などで語られるので不明確なところもあるが、おおよそ次のような経緯をとった。ナスターシャ・フィリップヴナは誕生祝の夜ロゴージンとともに出立したが、その翌日にはロゴージンから逃げてしまった。ロゴージンはモスクワで彼女を見つけ、1月初旬には彼女との結婚にこぎ着けた。しかし結婚式の直前ナスターシャ・フィリップヴナはロゴージンから逃亡し、ムイシキン公爵の下へ逃れた。二人は一ヶ月ともに暮らす。しかしムイシキンはそのときのことを振り返って、別々の村に住んでいたと述べている（第2部3、67頁）。復活祭〔1868年は3月31日〕頃、ナスターシャ・フィリップヴナは今度はムイシキンから逃れて、ある地主と駆け落ちし、さらにロゴージンのもとへ逃れた。ナスターシャ・フィリップヴナは再びロゴージンに結婚を約束することとなるが、今度も式の直前に彼女は失踪した。しかし5月中旬にペテルブルグに戻ったロゴージンとナスターシャとの間に和解が成立し、三度目の結婚の約束が取り交わされた。

ムイシキンは復活祭の頃、次のような手紙をアグラヤに送っていた。

かつてあなたはこのぼくに信頼の念をお示しく下さいました。おそらくいまではもう、ぼくのことをすっかりお忘れかもしれません。そんなぼくがどうしてあなたに手紙を書こうとしているのか、自分でも分かりません。どうしてもあなたにぼくのことを思い出していただきたいという、やむにやまれぬ気持ちが湧いてきたのです。まさにあなたに思い出していただきたいのです。……お三方の中でぼくの目に映っていたのはあなただけでした。あなたはぼくに必要です、とても必要です。自分のことであなたにお書きすること、お話することはありません。それにそういうつもりもありませんでした。

ぼくはただどうしてもあなたに幸せでいらしてほしかったのです。あなたはお幸せですか？それだけをぼくはあなたに申しあげたかったのです（第2部1、中24-25頁）。

彼はそれから「二ヶ月か二ヶ月半後」エリザヴェータ夫人からその手紙を見せるように言われたとき、「ほとんど一字一句に至るまで、書いたとおりに暗唱し」（第2部12、中293頁）ていた。これを受け取ったアグラーヤは「突然顔を真っ赤にし」た。その翌日必要な時に取り出せるよう一冊の書物の間に挟み込んだ。一週間後、その本が『ラ・マンチャのドン・キホーテ』であることに気づき、「なぜだか訳も分からずに大笑いした」（第2部1、中25頁）。この手紙についてはまた後で取り上げるであろう。

アグラーヤに惹きつけられた人物は何人もいた。ガヴリーラがそうであった。また、肺病やみの青年イッポリートは遺書とも言うべき手記をアグラーヤに読んでもらうことを願った。春の終わり頃、エパンチン家に出入りするようになった「名門」の青年将校エヴゲーニー・パーヴロヴィチ・ラドームスキーもアグラーヤに関心をもち5月頃求婚する。しかし、アグラーヤ自身は、ムイシキンと初めて会ったときから彼に関心をもっていた。後にナスターシャ・フィリッポヴナに対して、「はじめて会った日に、私はまずこの人をかわいそうだと思います。[中略]私がこの人をかわいそうに思うのは、この人がこんなにも純朴で、しかもその純朴さのゆえに、幸せになれると信じこんでしまったからです」と語っている。これは恋愛感情へと発展する。彼女はナスターシャ・フィリッポヴナに対しさらに次のように語った。「この人のように高貴なまでに純朴で、はてしなく人を信用できる人間を、私はこれまで一人として見たことはありませんでした。この人の話を聞いて分かりましたが、この人を騙そうと思えば誰だって騙すことができますし、また誰に騙されても、この人は後できっと許してしまいます。まさにそれだからこそ私はこの人を愛するようになったのです」（第4部8、下310-313頁）。しかしアグラーヤは、その人見知りと恥ずかしがり屋、さらにどうしようもない誇り高さからそのような気持ちをストレートにあらわすことはできず、逆にからかうのであった。ムイシキンがペテルブルグに戻ってからちょうど一週間後、アグラーヤは家族の前でムイシキンに、「どうか今度こそご自身の口からはっきりとおっしゃって — あなたは私にプロポーズをしようとしているの、それとも違うの？」とたずねた。これに対してムイシキンは息も絶え絶えに「申し込みます」と答えるとともに、「ぼくはあなたを愛しています、アグラーヤさん、とても愛しています。あなただけを愛しています、だから……どうか冗談にしないでください、あなたをとても愛しているのです」と述べた（第4部5、下195-196頁）。

一方ムイシキンがペテルブルグに戻ってきた頃、ナスターシャ・フィリッポヴナはアグラーヤに対して、ムイシキンとの結婚をすすめる手紙を何通も送るとともに、ラドームスキーをアグラーヤから引き離す画策をしていた。その態度とは裏腹にナスターシャ・フィリッポヴナが本当はムイシキンを愛していることを知っていたアグラーヤは、苛立ちと嫉妬から、ナスターシャ・フィリッポヴナをたずねてこの愛の問題に決着をつけようとする。ムイシキンとロゴージンも立ち会っていたが、その場は二人の女性の嫉妬とプライドと激怒が激しく交錯する修羅の場と化し、最後にナスターシャ・フィリッポヴナは、ムイシキンに自分を選ぶように迫った。「正気を失った」ナスターシャ・フィリッポヴナの顔を見て耐えられなくなったムイシキンは「これはあんまりじゃないですか！だってこの人は……こんなに不幸なのに！」とかわらうじて口ごもった。アグラーヤは「その一瞬の逡巡さえ耐えきれ」ず、部屋から飛び出していった（第4部8、下306-323頁）。その二週間後、ムイシキンとナスターシャ・フィリッポヴナは結婚式を挙げることになったが、またもやその直前に彼女は待ち構えていたロゴージンとともに逃亡した。しかし今度はそれだけでは終わらなかった。その晩ロゴージンは自宅でナスターシャ・フィリッポヴナを殺害した。翌日

ロゴージンを訪ねたムィシキンは、ロゴージンとともに遺体のそばで夜を過ごす。人々が寝室に入ってきたときには、ムィシキンは白痴の状態に戻り、もはや何を質問されても分からず、人の識別もつかなかった。彼は再びスイスのシュナイダー教授のもとに送られた。一方ロゴージンは15年のシベリア流刑となった。その後、アグラーヤは、莫大な資産家という触れ込みのポーランドの亡命貴族に異様な惚れ込み方をした。しかし結婚後、彼は伯爵ではなく、「なにやら暗く怪しげな過去を背負った亡命者」で、資産家でも何でもないことが分かった。

以上が四人の主人公たちの愛憎劇のおおよそである。とりわけムィシキン公爵は同時にナスターシャ・フィリッポヴナとアグラーヤの二人を愛した。それが何故可能であったのか。そもそもそれらは愛と呼べるものであったのか。さらに、この愛は、キリストといかなる関係にあるのか。

IV

作中、「きっとあなたはどちらの女性のことも、一度も愛したことはなかったんですよ」とムィシキンを批判した人物がいる。アグラーヤに求婚したことのあるラドームスキーは、当時のロシアの女性問題に対する理解と合理的な彼の思考から、女性解放問題の感化を受けていたムィシキンは、「辱められた一人の女性に関するもの悲しい、そして胸の高鳴るような物語」を聞いて、彼の生来の世間知らずと並外れた純朴さと驚くべき節度のなさによって、ナスターシャ・フィリッポヴナに対する頭でっかちな信念の堆積を作り上げていった、と理解する。それは自然なものではなく、「いくら数奇な人生を歩んできたからといって」、彼女の「悪魔的な傲慢さ」、強烈なエゴイズムを正当化はできない。そして両親の前で結婚を申し込んだ「あんなにもすばらしい娘さん」を騙したのは「キリスト教的」と言えるのか。しかも今、ナスターシャ・フィリッポヴナと結婚しようとしている。これは本当なのか、そうラドームスキーはムィシキンを批判した（第4部9、下336-341頁）。少し長くなるが、二人の会話の最後の部分を引用しよう。

「ぼくは心から彼女を愛していますよ！だってあれは、子供なんですから。いまや彼女は子供です、すっかり子供なんです！ああ、あなたは何も知らないんだ！」

「でもあなたは同時にアグラーヤさんにも、愛していると断言されましたね？」

「ええ、そうです、そうです！」

「なんですって？すると、二人とも愛したいというのですか？」

「ええ、そうです、そうです！」

「待ってくださいよ、公爵、何を言っているんですか、目を覚ましてください！」

「ぼくはアグラーヤさんなしでは……ぼくはどうしてもあの人に会わなくちゃならない！（中略）ああ、もしもアグラーヤさんが知っていたら、すべてを知っていたら……そう、必ずすべてを。なぜなら、この場合すべてを知っていなくてはならないからです。それが第一なのです！どうしてわれわれは、他人についてすべてを知ることがないのでしょうか。それが必要な時に、つまりその他人が悪いことをした時に！（中略）きっと、何もかもぼくが悪いのです！どんな罪を犯したのか、まだ自分でも分かりませんが、でも悪いのはぼくです……。ラドームスキーさん、そこにはなにか、ぼくからあなたには説明しにくい要素があって、語る言葉さえ思い浮かびませんが、でも……アグラーヤさんならきっと分かってくれます！ああ、ぼくはいつも信じていました、あの人なら分かってくれるって」
「いや、公爵、分かってはもらえませんよ！アグラーヤさんは一人の女性として、人間として愛した

のであって、そんな……肉体のない精神として愛したのではありませんから。いいですか、気の毒な公爵さん、きっとあなたはどちらの女性のことも、一度も愛したことはなかったんですよ」(第4部9、下345-346頁)。

ラドームスキーの言うことは、よく理解できることである。彼は最終的に公爵が「いくぶん正気を失っている」という判断を下した。しかし、ムィシキンの愛ははたしてラドームスキーが言うように観念的なものに過ぎなかったのか。あるいはムィシキンが言うように「説明しにくい」ものの、何か彼の本質に根ざしたことであったのか。作者がわざわざ強調している「すべてを知る」とはどのようなことなのか。それらのことを念頭において、ムィシキン公爵の人格的特徴を次に検討しよう。

『白痴』を呼んで誰もが感じるのはラドームスキーが言うようにムィシキンの「並外れた純朴さ」である。アグラヤーは「高貴なまでに純朴で、はてしなく人を信用できる」点に強く惹かれた。彼はおよそ自己の利害に無関心な人物である。そのため、人を自分自身や何かのために利用しようとはしない。自分が売り買いのように扱われてきたナスターシャ・フリリッポヴナが惹かれたのもまずこの点であったと思われる。このことは他面において、ある目的に向かって、あらゆることを合理的に秩序づけたり、計画的に物事をすすめていくことは苦手となる。心情倫理的にならざるをえない。また純朴であることは、認識能力がないことを意味しない。自己の利害から無関心であるゆえに、人を偏見なく見つめ、そのひとの欠点をも鋭く洞察する力を備えている。それ故、彼は騙されるというよりも、むしろ知っていながら許してしまう。その点で彼はいわゆる白痴ではない。アグラヤーはつぎのように語っている。

私はあなたを一番誠実で、一番正しい人だと思っているわ。他の誰よりも誠実で正しい人だ。だから、人があなたのことを、頭がどうか……つまり時々あなたが頭の病気だなんて言う人がいるけれど、それは間違っていると思うの。私はそう思うし、人にも言うけれど、それはたとえあなたが本当に頭の病気だとしても、そのかわり大事な知恵では、他の誰よりもあなたのほうがずっと優れていて、およそあんな人たちの夢にも及ばないような知恵を持っているからよ。なぜって知恵には二通りあるでしょう — 大事な知恵と大事でない知恵とが (第3部8、下14頁)。

また彼はいわゆる義人ではない。偏見のない目は自分に向けられて、自らの中の猜疑心を鋭く感じたりする。それ故しばしば彼は「周囲のすべての人間のうちで自分こそ道徳的に見て最低の人間だ」と思う(第2部7、中170頁)。

さらにムィシキンの性格を考える上で重要な二つの点がある。それぞれすでにスイスにいたときから見られるものである。ムィシキンは初めてエパンチン家を訪問したとき、エリザヴェータ夫人と三姉妹の前でスイスでの経験を話した。最初の年、「いかにもおとなしい、善良な、穢れない目をしていて」マリーという結核の兆候のある20歳の女性と出会った(第1部6、上142頁)。母親と二人暮らしであったが、あるとき旅の若者が誘惑して連れ去り、あげくの果てに捨て去った。一週間後着の身着のままで帰ってきたマリーをまず母親が見せしめにし、村人たちも一斉に罵り、子供たちの一団がからかい汚物を投げつけた。ムィシキンは、「マリーのために何かしてやりたいと思ひ立ち」、小さなダイヤの飾りピンを売って8フランを渡した。そのとき、キスをして、「とてもかわいそうだからだ。ぼくははじめからおまえが悪い女だとは少しも思っていなかった。ただ不幸な女だと思っただけだ」と語った(第1部6、上146頁)。それを見て子供たちはムィシキンに石を投げ、マリーをいっそう侮蔑するようになった。しかしムィシ

キンからマリーがどんなにかわいそうかを繰り返し聞いて、「マリーを気の毒に思うようになった」（第1部6、上148頁）。ムィシキンがキスをしてから二週間後、母親が死亡しその葬儀の場で牧師は公然とマリーを侮蔑した。このとき子供たちは牧師に腹を立てて非難した。村人たちは子供たちがマリーを好いていることを知って驚きそのゆえにムィシキンを批判するようになった。まもなくマリーは寝込むことになった。子供たちは毎日彼女を訪問した。次第に村人たちもマリーを受容するようになっていった。ムィシキンはこの話を次のように締めくくった。

子供たちのおかげで彼女はほとんど幸せに死んでいくことができたのです。彼らのおかげでわが身の災難を忘れ、あたかも彼らから許しを与えられたかのようなようでした。なんといっても彼女は最後の最後まで、自分を大きな罪を犯した人間とみなしていたのですから（第1部6、上153頁）。

このマグダラのマリアを連想させるマリーとの関わりはムィシキンの特徴をよく示している。誰もマリーの悲惨な状況に目をとめなかったときに、ムィシキン一人が彼女のつらさを理解し何かをしてやりたいと思って実際に行動した。彼にはそのように他者の苦難への限りない共感と同情とそのためになにかをしたいという本能的傾向がある。彼は周りの無理解と非情を非難するようなことはなく、ひとり哀れみの気持ちは行動であらわす。ムィシキンが死刑を否定するのも哀れみと関係するだろう。リヨンでの死刑執行の現場で、彼はギロチン台へ一歩踏み出した死刑囚の顔と出会ったとき、死刑囚の思いが彼を貫いたのであろう（第1部5、上132頁）。

ところで彼はマリーを通じて子供たちと親しくなり、その後三年間「子供たちと一体化」した。「自分でもよく分かりませんが、子供たちに会うたびに、ぼくはなんだかとても強い幸福感を覚えるようになったのです」と彼は語っている（第1部6、上156頁）。この子供たちとの関係にもうひとつの彼の特徴があらわれている。彼はスイスで外国人であり、治療を受ける身であり、みんなに白痴扱いされた。彼には根強いよそ者意識、周りとは断絶している思い、言いしれぬ孤独感がある。この世界に対する疎外感は自己が受容されることを求める。彼は子供と一体化することによって自らが受容されていることを感じ幸福だった。

他者の苦悩に対する限りない共感と行動に至る哀れみ、それに周りに対する孤独感と受容への希求、この二つの思いはスイス時代には典型的にマリーと子供たちに対してあらわれたが、恋愛という感情とは無縁であった。彼は繰り返しマリーへの思いは恋愛感情ではなかったと言明している。またマリーに対する哀れみは子供たちを通じて周りに影響を与え、子供たちとの一体感によって受容への思いも満たされ、その後のスイスでの三年間は彼自身幸せであったと言っている（第1部6、上156-157頁）。しかし彼はスイスを離れ、複雑な人間世界に乗り出す。この時「ぼくはこれから世の中に出ていくんだ」（第1部6、上157頁）と意識していた。スイスとは異なるこの複雑な世の中においては、その純朴さは傷つけられることが予想され、哀れみの行為も周りを良くするとは限らず、受容への希求は簡単に満たされることはないだろう。ロゴージンやナスターシャ・フィリップポヴナ、アグラヤー等に出会い、スイス時代とは異なり、恋愛の渦の中に巻き込まれていく。以下、特にナスターシャ・フィリップポヴナとアグラヤーに対する感情が、彼の哀れみの念と受容への希求といかに関わるかを検討しよう。

V

ナスターシャ・フィリッポヴナは絶世の美女であった。しかし不思議なことに、彼女を真剣に愛そうとしたのは、ムイシキン公爵とロゴージンの二人だけであった。たとえばエパンチン將軍の秘書であったガヴリーラは彼女を「最初は愛してい」た。しかしトーツキーから彼女との話とともに75,000ルーブリの持参金の話があったのちは、金のために人の愛人を譲る受けることへの屈折した気持ちからか、「愛人にするにはいいがそれ以外には向かない女というのがいる」と考えるようになった（第1部11、上160頁）。ガヴリーラの場合には、自己へのやましさを、ナスターシャ・フィリッポヴナを愛人にのみふさわしい女と決めつけることによって、ごまかそうとしたと思われる。彼はナスターシャ・フィリッポヴナとの人格的な出会いをしていなかった。ナスターシャ・フィリッポヴナに対する典型的な見方はアグラーヤに見ることができる。ムイシキンから逃げたのはナスターシャ・フィリッポヴナが本当にムイシキンを愛していなかったからだと考える。それは、彼女の利己主義のゆえ、「ただひたすら自分の恥辱だけを、そして自分が辱められた、傷つけられたという絶え間ない思いだけを、愛することしかできない」からだとして断定する（第4部8、下311頁）。

ではムイシキンは彼女をどう見て、愛していたのか。ラドームスキーが言うように観念の産物でしかなかったのか。繰り返しになるが、ムイシキンがナスターシャ・フィリッポヴナの写真を見た印象は二つの点からなっていた。量りしれぬプライド、憎悪に似た侮蔑と、「人を信じやすいような、驚くほど純真な要素」、この二つが彼女の美と融合して、同情のようなものをかき立てたのであった。これは実際に彼女を見、さらに「ほとんど毎日のように彼女と会っていた一月間の田舎暮らし」（第3部2、中359頁）のなかで、深められていった。ムイシキンはあるとき、アグラーヤに次のように語った。

あの人はずいぶん錯乱して叫んでいます — 自分の罪なんか認めない、自分は他の人々の犠牲であり、放蕩者の、悪者の犠牲になったのだと。でもいいですか、人に向かって何と言おうと、あの人自身が真っ先に自分の言葉を疑っているのです。それどころか、自分の良心のすべてにかけて、やはり自分にこそ罪があるのだと、そう信じているのです（第3部8、下25頁）。

犠牲者だという意識と自分にこそ罪があるという相反する二つの意識をムイシキンはナスターシャ・フィリッポヴナから強く感じた。彼はまた別の機会に彼女との日々を追憶して、「あの顔がそもそも情欲を呼びおこすだろうか？彼女の顔が呼びおこすのは苦悩だ」と強く思った（第2部5、中113頁）。この理解にたてば、人々が彼女に情欲を感じないのは当然であり、彼女の苦悩を感じない者は、彼女を理解していないことになる。この苦悩への理解を彼は「果てしない哀れみの感覚」と表現した（第3部2、中359頁）。ムイシキンはこの苦悩をともに担おうとした。誕生祝の時に結婚を申し込んだとき、彼は「ぼくがあなたのお世話をしましょう」と言った（第1部16、上361頁）。田舎での一ヶ月はその実践であったろう。しかし彼女はムイシキンに惹かれ、彼のような存在をずっと憧れてきたにもかかわらず、プライドからそのような哀れみを受け入れることはできなかった。逃れのない状態で彼女はいつそう苦しみ、ロゴージンとムイシキンとの間を振り子のように揺れ動いた。ムイシキンはそこに狂気を感じ取り、哀れみの感覚とともに彼女から恐怖を感じたのであった。作者はこの恐怖を、「もし仮に一人の女性をこの世のなによりも愛し、あるいはそのような愛の可能性を予感していながら、不意にその女性が鎖につながれ、鉄格子の向こうに入れられて、看守の棍棒で威嚇されているのを見た者がいるとしたら、その人の味わう印象

は、いま公爵が味わっている印象にいくぶん似ていることであろう」(第3部1、中360頁)と説明した。それは相手を救いえない絶望的な恐怖である。ムイシキンがアグラヤにあの手紙を書いたのはそのような状態のときであった。ムイシキンはこの哀れみ、同情を、何度も愛ではない、と声明した。

ではロゴージンはなぜナスターシャ・フィリッポヴナを愛したのか。彼は謎である。「あいつへの同情なんてかけらもない」と断言した(第2部3、中69頁)。ナスターシャ・フィリッポヴナによれば彼は情が濃い。彼は嫉妬の人である。ムイシキンは、彼にあつては愛と憎しみとの区別がつかないことを見てとり、やがてナスターシャ・フィリッポヴナを殺すだろうと、すでに初めて会ったときから認識していた。ナスターシャ・フィリッポヴナも、自分が殺されることを予期していた。

しかしロゴージンは単なる情欲の人ではない。恋のライバルであるムイシキン公爵に対して憎悪を感じつつ、彼に対する共感を完全に捨て去ることはできない。憎悪をなんとか制御しようとして、彼と十字架の交換をし、兄弟の契を結ぼうとしたが、結局彼を殺そうとした。しかし、その瞬間にムイシキン公爵は癲癇の発作を起こし、実行には至らなかった。ナスターシャ・フィリッポヴナが本当に好きなのは、ムイシキン公爵であることをよく認識していて、一時は、ムイシキン公爵に譲ろうとしたこともあった。ムイシキンは、ロゴージンが「苦しむことも同情することもできる、大きな心の持ち主だ」と考えようとしていた。彼は「同情こそ、人類全体が生きていくためにもっとも大切な、そしておそらくは唯一の法」と考えていたので、ロゴージンにあつても「同情が分別と知恵を与えるだろう」と考えていた(第2部5、中113-114頁)。

ムイシキンが指摘するように、ロゴージンがもしナスターシャ・フィリッポヴナと出会わなかったら、平凡で父親と同じようにせつせと金銭をため込む生活を送ったかもしれない。彼はもともと単なる情欲の人ではない。それ故、彼をロシア正教の去勢派と関係づける解釈もあるが、それでロゴージンの謎が解消されるわけではない。なぜそもそも彼がナスターシャ・フィリッポヴナにあんなにも惹かれていったのかは、分からないからである。ロゴージンの不幸は、莫大な財産を受け継いだことにあつたかもしれない。財産がなくても彼はナスターシャ・フィリッポヴナへの思いは変わらなかったであろう。そのときは、彼女を独占しようとする傾向よりも、むしろ彼女に仕えようとする傾向が前面に出たかもしれない。ペテルブルグ行き列車の中でロゴージンの話にムイシキンが惹かれたのは、彼が父親との関係がどうなるかに重きを置かず見境なく、高価な宝石をナスターシャ・フィリッポヴナに贈った点にあつた。そこには人間を目的と手段の連鎖から捉えようとする傾向はない。ロゴージンとムイシキンとの性格には交わる点がある。

ムイシキンによれば、どうしてもナスターシャ・フィリッポヴナのすべてを理解することが大切であった。多く的人是はナスターシャ・フィリッポヴナに高慢、自己の辱めに対する憤り、利己主義しかみない。彼女の苦悩、彼女の罪人としての意識を見ようとしなない。ムイシキンの独自の点、彼のナスターシャ・フィリッポヴナに対する愛の独特な点は、彼女の罪人としての意識を理解し、その苦悩に対する限りない哀れみを感じて、彼女を救おうとしたことにあつた。ムイシキンという人格の大きな特徴である他者への限りない共感と哀れみがナスターシャ・フィリッポヴナへの思いと行動を規定していた。次にアグラヤに対する愛情をどのように理解することができるか検討しよう。

VI

ムイシキンはエリザヴェータ夫人に次のように語った。

ぼくは自然によって辱められた人間なのです。ぼくは24年間も病気でした。(中略) 世間ではぼくは無用な人間です……。いや余計者を気取って言っているわけではありません(中略) 世の中にはある種の崇高な思想があって、そうした思想はぼくなどが話題にすべきではないのです。なぜなら、ぼくが口にするに必ず、そうした思想がみんなの笑いものになってしまうからです。(中略) ぼくには上品な身振りも、節度の感覚も欠けているのです。(中略) ですからぼくには権利がないのです。……おまけにぼくは疑り深く、ぼくは……ぼくは、自分がお宅の皆さんから侮辱されるなどということはありません、それどころか身に余るご厚意を賜っていると確信しているのですが、それでも分かるのです(本当にはっきりと自覚しているのです)、20年も病気をした後ではきっと何かの跡が残るものだし、ですから自分が人々の笑いものにならずにはすまないだろうと……時々とはということです……。そうでしょうか？(第3部2、中343頁)

スイスにいたときは、彼は子供たちとの交流により、その余所者意識を克服することができた。「Ⅱ」で述べたように、ムィシキンはエパンチン家の夫人とその姉妹たちとスイスのことを話していたとき、「あのとき以来久しぶりにほっとした気持ちを覚えたのです。」と語った。「あのとき」とはもちろんスイスで子供たちと分かれて以来のことである。この時彼がエリザヴェータ夫人について、「確信をもって言うのですが、お顔からすると、あなたはまったくの子供でいらっしゃいますね」(第1部6、上160頁)と語ったのは象徴的である。エリザヴェータ夫人は、彼がアグラーヤの結婚相手としてはふさわしくないとしつつ、彼の人間性を最もよく理解し、評価していた。親しい人々にアグラーヤの婚約者としてムィシキン公爵を披露する場で「無用な人間」ムィシキンが失敗をしでかしたあと、夫人は、「私だったら、昨日の客なんか全部追い払っても、あの人を残すわよ。それだけの値打ちがある人だもの」と言った(第4部7、下283頁)。またアグラーヤにも「ほとんど何か子供っぽいもの、小学生のようにひたむきで隠しても隠しおおせぬもの」が見られた(第2部6、中147頁)。エリザヴェータ夫人によれば、夫人とアグラーヤとはうり二つであった。ムィシキンは初めて会ったときから、エパンチン家の女性たちに安らぎを感じていた。

ムィシキンの受容への希求は、アグラーヤへ集中していく。復活祭頃に彼がアグラーヤに書いた手紙については、すでに「Ⅲ」で紹介した。その目的をエリザヴェータ夫人に問い詰められたとき、

「自分でも完全には分かりません。ただ率直な気持で書いたのは確かです。あちらでは時々ぼくにも、生命力がみなぎり壮大な希望に胸が満たされるような瞬間があったのです」

「どんな希望なの？」

「説明はしにくいんですが(中略) まあひとこと言えば未来への希望、そして自分があそこでも他人ではない、異邦人ではないかもしれないという喜びなんです。ぼくは急に祖国にいたことが楽しくなってきました。そうしてある晴れた朝、ペンを取ってあの人に手紙を書いたのです。なぜあの人に書いたのか、それは分かりません。ただ、時には近くに友達がいてほしくなるじゃないですか(第2部12、中294-295頁)。

「他人ではない、異邦人ではないかもしれないという喜び」という表現に彼の思いがよくあらわれている。ムィシキンはその後アグラーヤに対して、「あれは最大の敬意を込めた手紙で、ぼくの生涯で一番辛かった瞬間に、心の底からあふれ出てきた手紙だったんです！あの時ぼくはあなたのことを、何かの光の

ように思い出したのです」(第3部8、下20頁)と語った。それは、ほとんど毎日ナスターシャ・フィリッポヴナと会っていた田舎での生活のさなかであった。

しかしムィシキンはその気持ちを愛情とは明確に理解していなかった。彼が再びペテルブルグにもどり、その郊外で再びアグラヤと会って、出会いを重ねていくなかでも「彼女に恋をするという可能性」はもちろん、まして『『自分のような人間が』恋愛の対象になるなどということ』は想像もできないことであった。これには彼の異邦人、無用者としての意識が働いているものと思われる。まして彼女に結婚を申し込もうとは思っていなかった。ただ彼女と会い、その横に座り、彼女の話聞き、「じっと彼女をみつめていること」、それが彼にとってすべてであった(第3部3、中387-388頁)。しかし意識の奥に恋愛感情が存在することを、ロゴジンは鋭く見抜いていた(第3部3、中392-395頁)。

ムィシキンのアグラヤに対する気持ちにはもうひとつの大きな特徴がある。彼がペテルブルグに着いてから6日目、ちょうど彼の誕生日の朝7時、彼は公園の緑のベンチでアグラヤと会った。そのとき話はナスターシャ・フィリッポヴナとの田舎での一ヶ月間の出来事に及んだ。

「すっかり話してちょうだい」アグラヤが言った。

「あなたにお聞かせできないようなことは何ひとつありません。どうしてまたあなたにすべてを話そうという気になったのか、しかもどうしてあなただけなのか、自分でも分かりませんが、もしかしたら、あなたのことが本当に大好きだったからかもしれません」(第3部8、下24頁)。

そしてムィシキンは、ナスターシャ・フィリッポヴナが自分は放蕩者の犠牲者なのだと主張しつつ、本当はその言葉を疑っていて、自分にこそ罪があると信じていること、そして彼がその迷妄を晴らしてやろうとしたことに対して、「自分はお高くとまった同情も援助も」はっきりと拒否したこと、またムィシキンのアグラヤに対する恋愛感情には、自己が受容されることへの願いと、アグラヤならすべて、とりわけナスターシャ・フィリッポヴナのすべてを理解してくれるだろうという期待が含まれていた。「IV」でラドームスキーのムィシキン批判を紹介したが、そこでムィシキンが弁明したことばの中の「すべてを知る」とはどのようなことなのか、注意を喚起しておいた。繰り返しになるが、その部分をもう一度、引用しておこう。

「ぼくはアグラヤさんなしでは……ぼくはどうしてもあの人に会わなくちゃならない！(中略) ああ、もしもアグラヤさんが知っていたら、すべてを知っていたら……そう、必ずすべてを。なぜなら、この場合すべてを知っていなくてはならないからです。それが第一なのです！ どうしてわれわれは、他人についてすべてを知ることがないのでしょうか。それが必要な時に、つまりその他人が悪いことをした時に！(中略) ラドームスキーさん、そこにはなにか、ぼくからあなたには説明しにくい要素があって、語る言葉さえ思い浮かびませんが、でも……アグラヤさんならきっと分かってくれます！ ああ、ぼくはいつも信じていました、あの人なら分かってくれるって」

さて、今まで述べてきたことをまとめておこう。ムィシキンの並外れた純朴さ、自己の利害への無関心は、人を決して目的のための手段とみることをしない。それゆえ、人を偏見なく見つめ、その人の本質を鋭く認識する。その悪に対しても曇りない目を向けるが、決して人を非難するようなことをしない。そし

て他者の苦難や苦痛に対する限りない同情と哀れみを感じて、それをともに担おうとする。同時にそのような純朴さは、まわりとの断絶を意識させ自己を異邦人、余所者、無用者として理解するようになる。そこから、自己が受容されることを希求する。ムィシキンのナスターシャ・フィリッポヴナとアグラーヤに対する思いは、そのような彼の人格の本質に根ざすものであった。ナスターシャ・フィリッポヴナへの感情には他者の苦難に対する限りない哀れみがあり、アグラーヤに対する感情には自己の受容への希求がある。ラドームスキーが批判するように、たしかにムィシキンは結婚がいかなることか理解することはなかった。しかし彼の愛は観念の産物であって、「どちらの女性のことも、一度も愛したことはなかった」という批判は、当を得ていない。むしろ、ムィシキンが常識人ラドームスキーと異なる存在であることを、積極的な意味において示していると言えるであろう。

最後に、このようなムィシキンの存在が、キリストと、しかもホルバインの絵のキリスト像といかに関係するか、検討しよう。

VII

恋愛は友情とは異なり排他性を特徴とする。嫉妬や独占欲などと切り離すことは難しく、不安定である。この恋愛における不安定さを克服するには、二つの道がある。ひとつは結婚によって排他性が公に保証されることと、別の愛の形態へとかわることである。キリストと恋愛との関係を考えた場合、普遍的な救済者という性格を考えると、排他性を特徴とする恋愛やその公の保証である結婚は、理念的には考えられない。

キリストを模倣しようとする動きは、ヨーロッパのキリスト教世界では、たとえば、清貧（無所有）、禁欲、謙遜・謙卑（humilitas）となってあらわれた。これをムィシキン公爵と比較してみると、清貧については、彼が遺産相続した時点で異なった。これは、彼のスイス時代とロシア時代とでは本質的に異なる。ムィシキンを『貧しき人々』や『罪と罰』のような世界に置くこともありえたであろう。スイス時代にムィシキンが周りの環境を変え得た要因は、その世界の構造の単純さとともに、案外清貧の問題が関係しているかもしれない。禁欲は、ムィシキン公爵の身体的制約によって示唆されている（第1部1，上28頁）。そして最後にムィシキンとキリストとの関連を見る場合に、もっとも重要なのは、humilitasである。humilitasは自ら低くなることを基本とする。たとえば、次に引用する新約聖書ピリピ2章4節から8節にかけて、ひじょうによく表現されている。

自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができなるとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿を取り、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

自分を卑しくすること、仕える姿をとること、それがキリストにおいては、十字架上で人間一人一人の罪を背負って死ぬことにおいて頂点に達した。キリストの受難は、一人一人の罪と苦難を哀れみ、その苦悩を代わりに背負うことであった。ルターは隣人愛の本質をそのようなキリストの模倣に見出した。『キリスト者の自由』において、「私は私の信仰と義とをさえも、隣人の罪をおおうために神のみ前に捧げ、

みずから彼の罪を負って、それが私自身のものであるかのようにひたすら行動すべきである。見よ、これが、愛が真実である場合の愛の本性である」(第29章)と表現した。

ムィシキンのナスターシャ・フィリッポヴナへの思いの本質は、恋愛感情ではなく、同情、哀れみにあることを「V」において考察した。そしてムィシキンにあっては、この哀れみは、かれの人格の本質をなすものであった。その点で、ムィシキンのナスターシャ・フィリッポヴナへの哀れみ・同情は、キリストの模倣を超えて、キリストの本質そのもの、その御姿と類似関係にたつ。ナスターシャ・フィリッポヴナとアグラヤとのあれかこれかの選択において、ムィシキンがアグラヤを選択し、結婚をしていたならば、「非の打ちどころのないまことに美しい人間」をキリストとの関連において創作するという試みは瓦解していただろう。しかしアグラヤとの関わりが、小林秀雄が言うような「病人が健康を夢見たに過ぎぬ⁴」ものでもない。それは一方でムィシキンの本質に根ざしていたのである。神であり人であった救世主イエスにあっては、アグラヤのような存在との関係は起こりえないが、「まことに美しい人間」を描くという点において、創作上重要な事柄であった。そのことによりムィシキンの人間性はより豊かにより深く描かれた。またアグラヤが破滅していくことは、ムィシキンとアグラヤとの関係が密接であったことを示している。

最後に残された問題は、以上に述べたようなムィシキン像とホルバインのキリスト像との関連である。これが『白痴』における美の理解とどう関係するかは別の機会に譲ることにして、両者の相関関係に言及することにとどめたい。ハンス・ホルバインの『墓の中のキリストの屍』の模写についてのイッポリートの描写は二つの特徴をもつ。ひとつは、キリストの苦難、罪を背負うと言うことのむごたらしさを示している。もうひとつは、自然の法則を逃れることのできない無残な死体を描くことで復活が信じがたいことを示している。そこにはキリストのhumilitasが無残な結果に終わることが示唆されている。一方ムィシキンを中心とする四人の主人公においても、ムィシキンの哀れみと受容への希求は挫折し、四人とも破滅の道を歩まざるをえなかった。『罪と罰』の中央部分で、ソーニャがラスコーリニコフに、ヨハネ福音書のラザロの復活を朗読する場面がある。これは、二人の則を踏み越えてしまった人間にとって、その救済はラザロが復活したことと同じく、神の超越的な「恩寵」の働きによるしかないことが暗示されている。ここには切実なる希求が見られる。しかし、『白痴』においては、「恩寵」ではなく、「自然」のもとに服する哀れみの姿が描き出される。復活は『カラマーゾフの兄弟』に待たねばならない。スイスにおけるムィシキンと子供たちの別れは、次のように描かれていた。

いよいよぼくが汽車に乗り込んで、汽車が動き出すと、子供たちはぼくに向かって一斉に『万歳！』と叫び、汽車がすっかり見えなくなるまで長いこと同じ場所にたたずんでいました(第1部6、上159頁)。

『カラマーゾフの兄弟』は次のように終わる。なお、ナスターシャ・フィリッポヴナ・バラシコヴァは、ナスターシャが復活を、バラシコヴァが子羊を、すなわち贖ない主である子羊キリストの復活を示唆していることを付記しておく。

「カラマーゾフ万歳！」コーリャが感激をこめて叫んだ。

「そして亡くなった少年に永久の記憶を！」アリョーシャがふたたび感情をこめて言い添えた。

「永久の記憶を！」ふたたび少年たちが唱和した。

「カラマーゾフさん！」コーリャが叫んだ。「ぼくたちがみんな死者からよみがえるって、宗教が言っているのはほんとうでしょうか、ふたたび生を受けて、もう一度会えるって、みんなとイリュエシエチカとも会えるって言っているのは？」

「きっとよみがえりますよ、きっとまた行き会えて、昔のことをお互いにたのしく、はればれと語り合おうですよ」なかば笑いながら、そしてなかば感動につき動かされながら、アリョーシャが答えた。

「ああ、そうになったらどんなにすてきだろう！」コーリャが思わず口走った。

「じゃ、これで演説はおしまいにして、追善供養に行きましょう。プリンを食べるからって、気にしなくてもいいんですよ。あれはずっと昔からのしきたりで、けっこういい面もあるんです」アリョーシャは笑いだした。「さあ、みんな行きましょう！今度は手をつないで行きましょう」

「永久にこうするんです、一生涯、手を取り合っていくんです！カラマーゾフ万歳！」コーリャがもう一度感激の声で叫んだ、と、もう一度、少年たち全員が彼の叫びに和した（『カラマーゾフの兄弟（愛蔵版 世界文学全集19）』江川卓訳、集英社、昭和56年、857頁）。

注

- 1 『ドストエフスキー全集16』（小沼文彦訳）、筑摩書房、141頁。
- 2 翻訳は望月哲男訳『白痴』（河出文庫、2010年）を使用。引用にあたっては、まず小説自体の部・章を示し、次いで翻訳が3巻に分かれているので、翻訳上の巻を上、中、下で示し、その後に頁数を記した。ドストエフスキーの作品については、江川卓の謎解きシリーズをはじめ、たくさん興味深い研究があるが、今回特に森有正『ドストエフスキー覚書』（ちくま学芸文庫、2012年）を参考にした。
- 3 アンナ・ドストエフスカヤ『回想のドストエフスキー（上）』（松下裕訳）筑摩書房、1975年、193-194頁。
- 4 小林秀雄『新訂小林秀雄全集第六巻ドストエフスキイの作品』新潮社、昭和54年、99頁。

付記

本稿は2012年度香川大学生涯学習教育研究センター公開講座「芸術とキリスト教—レンブラントとドストエフスキー—」の一部をまとめたものである。